

アルゼンチン

電力危機のブエノスアイレス

有名なアルゼンチンタンゴに「淡き光に」(A Media Luz)という曲がある。

コリエンテス通り348番地、2階、エレベーター
 管理人も隣人もいない
 部屋の中はカクテルと愛
 ……

そしてすべて淡き光の中で
 それは愛の魔術師
 淡き光の中で口づけ、淡き光の中で2人……

と歌っている。しかし今年の夏、ブエノスアイレスの人々はこのようなロマンチックな感慨に浸る間もなく薄暗闇の中で過ごさねばならなかった。それというのも昨年未からの電力危機が深刻化し、一日3時間から6時間の計画停電が実施されたからである。

当然のことながらこうした計画停電はブエノスアイレスの市民生活に多大な被害をもたらした。エレベーターに乗っている最中に電気が切れ、救助のために消防隊が出動することもたびたびあった。筆者の住む部屋はアパートの13階にあり、停電中は階段を登り降りせねばならず、図らずも運動不足解消の一助となった。こうした停電は信号にまで及び、信号の消えた交差点を通過する時はまさに命懸けであった。テレビの放映時間は短縮され、映画館の第一回目の上映も中止、地下鉄の運行は夜の10時までとなった。また節電のため銀行の営業時間も8時から12時までとなり、早い時間にはお客は来ず、11時頃からカウンターの前には長蛇の列ができた。そして12時を過ぎると人は引け、銀行の集中する中心街の午後は人影も少なく、アスファルトの上を夏の太陽がジリジリと照り付けていたのであった。

こうした電力危機は、アルゼンチンの経済活動に大きな影響を与えたのは言うまでもない。身近

な例でいうと、最も被害を受けたのは鮮魚店であろう。消費者は夏場、停電中に魚が傷んでいるのではないかと恐れ、その購入を見合わせたため鮮魚店の多くは大幅に売上を落としたという。こうした消費者の行動は他の食料品にも及び、肉屋、スーパーマーケット、レストラン等も軒並み売上を落とした模様である。また、製造業においては停電のため予定した生産計画が実行できず、生産コストが上昇し、経営者はこうしたコスト上昇分を価格に転嫁せざるを得ないと主張した。

果てしのない電力危機が続くなかで、次第に政府に対する批判が高まっていった。折から大統領選挙を半年後に控え、時の野党ペロン党の大統領候補カルロス・メナムは政府の失政と無策を痛烈に批判した。これに対して与党急進党の大統領候補でコルドバ州知事でもあったエドアルド・アンヘロスは「コルドバ州では州政府の施政が万全で電力危機は起きていない。この動きを全国に広げよう」というテレビコマーシャルを流して対抗した。アルフォンシン大統領自らテレビで直接国民にエネルギー危機について説明し、協力を呼びかける事態に至った。

さて、こうした電力危機の原因であるが、当初政府は異常渇水による水力発電の低下であると説明し、天災であると国民を納得させようとした。しかし、それでは国民は納得せずマスコミの追及も続きもう少し詳しい説明がなされた。それによると、今回の電力危機は異常渇水による水力発電量の低下、アトゥーチャ原子力発電所の故障、火力発電所の稼働率低下、全国電力ネットワークの断裂に夏期における電力消費の急増が重なったためであると説明された。国民の激しい批判に対してエネルギー庁長官は、「一家に台所が二つないのと同様、アルゼンチンのように資金の乏しい国では余分な発電機は持てない」と答えひんしゅくを



宇佐見耕一（在ブエノスアイレス海外派遣員）

かった。

実際今夏の渇水はひどく、通常発電量の50%を賄っている水力発電が大幅に低下し、それでは火力発電が不足分を補えばいいのであるが、火力発電のほうの稼働率も低下していかかる事態に至ったわけである。土地の人も長年ブエノスアイレスに暮らしているがこんな大規模で長期の停電は初めてだという。渇水は天災であるからいたしかたのないことである。しかし、それを補うはずの火力発電の稼働率が大幅に低下していたのはどうしたわけであろうか。それは、設備の老朽化、不十分な維持管理、新規工事の遅れ等々のせいである。そして、あたりを見回してみれば、こうしたインフラストラクチャーの老朽化、維持管理不足はいたるところで見受けられる。例えば、ブエノスアイレスの電話は悪名高く、国際電話はおろか日中の市内通話にさえ困難を感じることもある。地下鉄に乗ると骨董品店に入ったのではないかと錯覚してしまうほどである。

こうしたインフラ部門の全般的老朽化の原因を簡単に言ってしまうと、それらを維持管理し更新するのに十分な資金がないことである。つい最近も国および公社に資材を供給している業者の団体が、代金支払い遅滞を理由に資材の納入を中止することを検討中であると発表する事件が起きたばかりである。納入業者の団体は、政府に代金を支払える分だけ物を買えと要求した。

アルゼンチンの公共部門の赤字・資金難は以前からたびたび問題にされてきた。公共部門は概して非効率といわれて久しいし、反インフレ政策の

ため公共料金の引上げが遅れがちであったということもあろう。また、電力の場合は、節電や計画停電のために売上が低下しているということも指摘されている。しかし、そうしたことの背景としてアルゼンチン経済全体の疲弊、長期的停滞という事実があることを忘れてはなるまい。1965年から80年にかけての年平均GDP成長率は3.3%であり、80年から85年にかけてのそれは-1.4%であった。また1965年から85年にかけての一人当たりGNPの年平均成長率は0.2%にすぎなかった。そしてその根底には、半世紀以上にわたって維持されてきた製造部門における輸入代替的性格と、輸出を農牧業関連産品に依存し続けるというアルゼンチンの産業構造に根差す問題が横たわっているのである。こうした長期経済停滞のなか、極端に言ってしまえばゼロサム社会に近い状況のなかで公共部門は他部門の激寄せをうけ徐々にその設備を老朽化させていったという構図を描くこともできる。

もちろん政府は、インフラ部門が荒廃するにまかせていたわけではない。現在工事中の発電所が完成すれば、電力事情は改善されるであろうし、地下鉄の延長工事も始まっている。また公共部門に民間資本を導入する計画も持ち上がっている。しかし工事は遅れ気味であるし、民間資本導入計画の先行きも現在のところ不明である。そして、今夏みられた電力危機に代表されるインフラ部門の悪化は、それがまたアルゼンチン経済を停滞させる一つの要因として作用しているのである。ここにアルゼンチン経済の陥った悪循環の一側面を見た思いがした。

現在ブエノスアイレスは秋風の吹く4月となったが、依然として停電は続き、市民は日常生活のなかに停電があることにすっかり慣れてしまったように見受けられる。かつては未明まで人の流れが絶えることがなかったといわれ、ブエノスアイレスを代表する繁華街であるコリエンテス通りも今は節電のために薄暗く、こうして図らずも強制された淡き光のなかでは道行く人々も姿もなにやらもの寂し気を感じられる。